



イペアンロー! (いただきます)

今回は、アイヌ料理の味わいを支える「だし」のお話です。

みなさんはキュウリウオを知っていますか？ 海の魚ですが、暖かくなると産卵のために川をのぼります。その名のとおり、キュウリのにおいがして、その青くさが苦手という人もいます。アイヌ語でもフラ



愛知県の豊橋駅と長野県の辰野駅をむすぶ、飯田線という鉄道路線があります。途中、天竜峡という大渓谷を通るこの路線は、大変な工事の末、1937年（昭和12年）に全線が開通しました。鉄道を通すには、土地の高さを測ってかたむきを調べ、設計図をつくります。これを「測量」といいます。旭川出身の川村カネト（1893～1977年）は、その大変な仕事をした、アイヌ民族で最初の測量技術者です。

カネトは小学生のとき、蒸気機関車を見て感激し、鉄道で働きたいと思うようになります。初めは測量士の手伝いをし、やがて正式にやとわれましたが、人より安い給料しかもらえません。組頭に聞くと「アイヌのくせに」とどなられました。くやしくてその晩、泣きましたが、人一倍働き、勉強して、測量技手の試験に合格。それが大きな自信となり、有能な技術者として、北海道の鉄道建設の先頭にたちます。

ある日、うでの良い測量士を探して、東京から人がきました。天竜峡という厳しい地形と、もろい岩盤の土地に、鉄道を通すというのです。

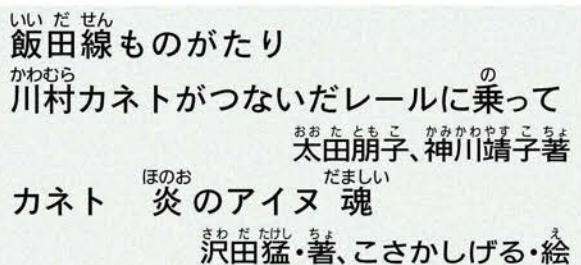
「フラリイチェブ」キュウリウオをだしに

ルイチェブ（においが強い魚＝くさい魚）と呼ばれています。

けれども、フラリイチェブは、焼き干しにすると、とてもおいしいだしが出ます。うろこを取り、頭と内臓を除いて、くしにさしたり、あみにのせたりしてよく焼きます。火が通ったら、冷ましてから、いならなどを、すだれのように結びます。これを軒先などにぶら下げて風にあて、天日にさらして干し上げます。

だしを取るときは、なべに水とフラリイチェブを入れて、ひと晩おきます。翌日火にかけ、ふつとうしたら火を止め、魚を取り出します。私の母は、そのだしにしょうゆなどで味をつけて、そうめんを食べるのが大好きだったそうです。

アイヌ民族はほかに、カムイチェブ（サケ）、イチャニウ（マス）、シブン（ウグイ）などを焼き干しにしました。九州地方ではアコ（トビウオ）を焼き干しにしてだしを取ります。魚を焼いてから干すと、こばしくなり、うまみが閉じこめられて、味わい深く感じられるのだそうです。



カネトは引き受け、アイヌの仲間を集めます。アイヌの技術者が本州で鉄道をつくるのは初めて。カネトは仲間をたのしむがめします。

深い山の中で、イノシシやマムシにおそれながらの測量が続きました。現場かんとくになったカネトは、気のあらい和人の男たちに殺されそうにもなりました。カネトはこう言ったそうです。<生きていくということは、仕事に誇りを持つということだ>。アイヌも和人も、ともにほこりを持って仕事を続けよう、と。

こうしてカネトは、日本の鉄道の歴史にのこる仕事をなしました。（2017年、新評論 2200円／1983年、ひくまの出版＝絶版）



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

アイヌ新法3年

①

ウポポイ 同じ目的に向かう場所

2019年5月に「アイヌ施策推進法」という法律ができて、3年がたちました。法律は国の決まりです。「アイヌ民族は日本の先住民族である」と初めて書かれ、おたがいを大切にする社会を目指すことが国民の義務となりました。

この法律で何がかわっていったのか、今回から3回にわたっていきましょう。

みなさんの中には、胆振地方の白老町にある民族共生象徴空間（ウポポイ）に行ったことがある人もいでしょう。ウポポイは、アイヌのほこりが尊重される共生社会をつくるために国がもうけた施設で、20年に開館しました。修学旅行や家族旅行でアイヌ民族や和人がおとずれ、アイヌ語や歌、おどり、ものづくりなどにふれています。

今から150年ほど前、日本政府は、アイヌ民族や沖縄の琉球民族の言葉や文化を要らないものとし、日本語や日本文化を学ばせる決まりをつくりました。アイヌ民族には、そのようにして身近ではなくなったアイヌ文化を守ったり、今の時代に合った文化をつくったりしたい、先祖の歴史を知りたいという願いがあります。

ウポポイで働く人は、アイヌ文化を研究し、ふたたび盛んにすることを目指しています。アイヌ以外の人、ここをおとずれて歴史や文化を知ること、誤解がなくなり、アイヌ民族の



ことがよくわかるようになります。ウポポイには、公園と博物館、慰霊施設があります。どの場所でも、アイヌや和人、外国人など多くの民族が、いっしょに働いています。

大事なことは、こうしてさまざまな民族が同じ目的に向かって努力すること。そして、そうした場所の大切さを、かつてアイヌ民族の言葉や文化を否定した国が認めたことなのです。

きょうの目とば

慰霊施設

神様や先祖、亡くなった人についての考え方や言い伝えなどを「精神文化」と言い、人々はこれを大切にしてきました。

ところが、明治から昭和にかけて、和人の研究者が、1600体以上ものアイヌ民族の遺骨をほり、国内外の大学や博物館などに持ち帰りました。このころは、民族や人種によって優秀さにちがいがあり、頭の骨の形を調べればそれがわかると考えられていたのです。

のちに、そうした考えは科学的ではない上に、根っこに深刻な差別があったと批判されました。しかし、今も、別な研究のために遺骨を返したがない人がいます。ばらばらになった遺骨や、どこから持ってきたのかわからない遺骨もあります。

ウポポイの慰霊施設では、そうした遺骨を全国から集め、それぞれの地域に返すことを目指しています。それがよいように進められるのか、見えるようにすることも大切です。

いろいろな学び

言葉や文化を学ぶ方法は、教科書で勉強するだけではありません。道具を見たりさわったり、建物に入って人と話したり、仕事を見たり。昔話を聞いたり、おどりに加わったり、料理を作ったり。映像や音声で伝える工夫も楽しいものです。

昔のくらしだけでなく、今の姿を知り、新しい文化をつくることも必要です。ウポポイでは「赤ずきん」「3びきの子ぶた」など、だれもが知る話をアイヌ語で語る人形劇なども行われています。新型コロナウイルスの心配がなくなれば、さらにいろいろな学びが可能になるでしょう。